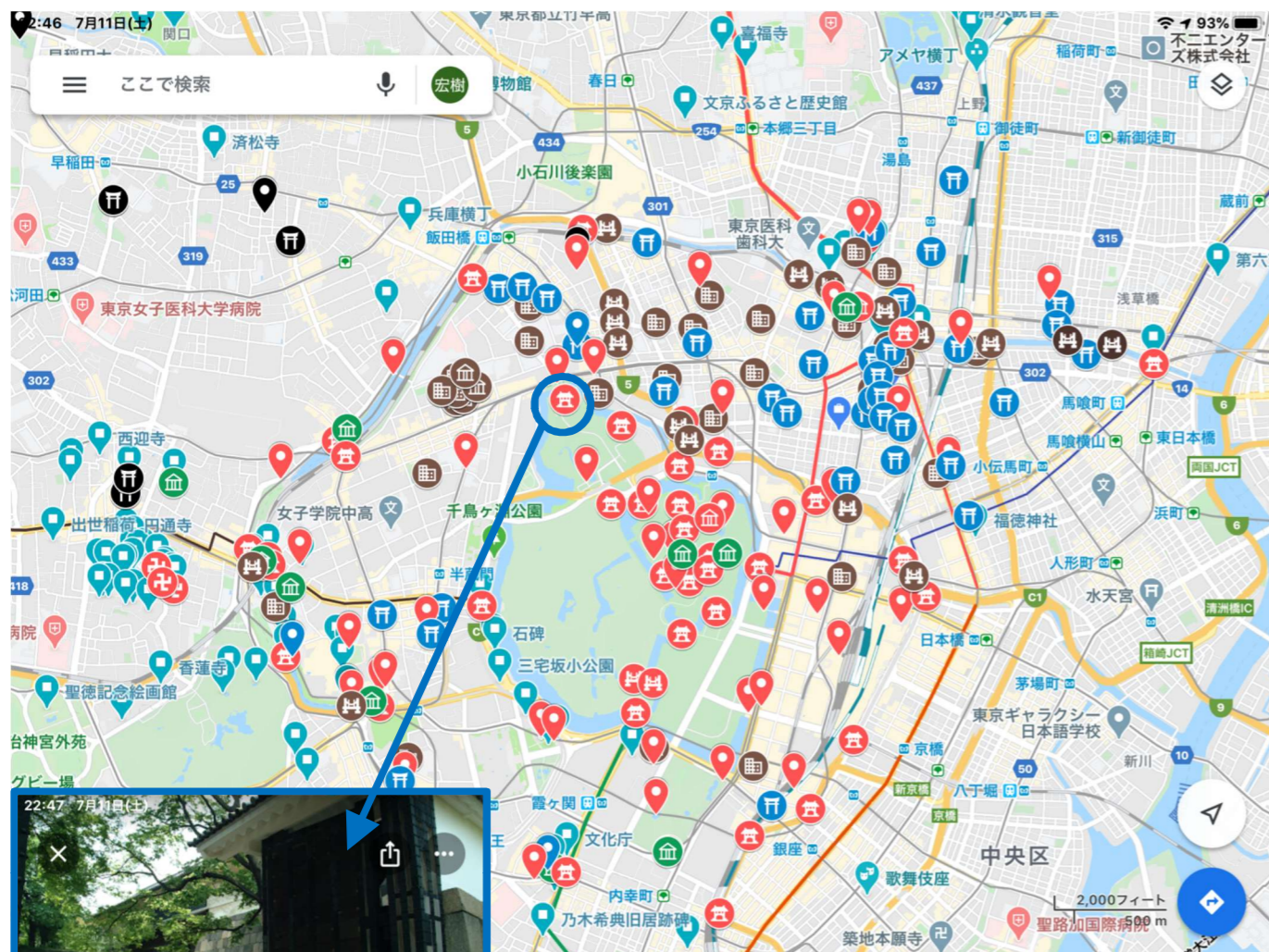


3周年記念行事 江戸東京歴史文化ルネッサンス 「プラットフォーム (Platform)」の創立に向けて



歴史文化遺産やまちづくりをHPなど 多様な媒体での情報発信を検討

江戸東京に残る歴史文化遺産の情報地図等を広く一般社会に公開して参ります。

まずは、今回調査した600の歴史文化遺産をデジタル上に地点表示し、さらに「江戸復原図」や現代図をデジタル化して観光などに活用できるように、これを契機に中期的事業として、順次、取り組みを漸進していきます。

＊「歴史文化遺産」の当会の定義は、日本の文化財（有形・無形）をはじめ未指定の文化財及び地域固有の地域遺産など多様な歴史と文化を発見し、総合的に位置付け、まちづくりに活かす「遺産」を「資産」として取組み、地域に、次世代に継承して近未来に託す遺産のこととします。

江戸城 田安門
江戸東京歴史文化
(35.6940490, 139.7493231)
27分

概要 写真

地図の凡例を表示

江戸城

説明あり。この門は九段坂上にあり、門前の土橋が千鳥ヶ淵と低地の牛ヶ淵の水位調整をしていました。江戸時代には江戸城北の丸から牛込門を経て上州（現在の群馬県）へ向かう道の起点でした。門の名は、この台地が田安台と呼ばれ、田安神社（現在の牛込築土神社）があったことに由来します。

門は1620年（元和6年）に建築され、1636年（寛永13年）に修繕されたものが現在に伝わっていると考えられます。高麗門の肘金具には、「寛永十三丙子曆九月吉日 九州豊後住人 御石火大工 渡辺石見守康直作」という銘が刻まれており、江戸城のなかでは最も古い建築物です。

現存する石垣は戦災により崩れ、1965（昭和40年）の北の丸整備に合わせて修復されたものですが、地上から2～3段分は江戸時代の原型を保っています。

江戸東京歴史文化ルネッサンス 2020年 今日的意義の検証

1. 世界の首都は、今、歴史的文化的創造の時代に入り熾烈な都市間競争にある。先進諸国のトレンド「クリエイティブシティ」の取り組みは、歴史や多彩な文化の奥深さにより都市の品格を高めている。

2019年12月京都宣言にあるように、国連の世界観光機関（UNWTO）と国連の教育科学文化機関（ユネスコ）は、観光と文化への貢献を強化し、持続可能な開発目標へのプロセスを促進させている。

2. 「東京文化ビジョン」が掲げる伝統と革新が共存し融合する都市東京の独自性と多様性は、江戸文化やアジア、欧米に開かれたコスモポリタンの文化を発展させて、現在に至っている。しかし、既に、首都東京には、世界に誇るべき莫大な歴史文化遺産が埋蔵されている。

3. 江戸城跡は、日本一壮大で美しく、城門や石垣、豊かな水を湛えた外濠や内濠は、昔の姿を今に残し、失われた天守や本丸御殿の痕跡は、往時の姿を想い起こされる。このように雄大な景観に包まれた特別史跡江戸城跡は、十分に世界遺産に匹敵すると云われて、久しい。

一方、城下町に集められた武家や民衆にかかわる遺産、ジェンダー等の社会の問題や矛盾また開発によって生じた災害にかかわる遺産なども残されている。

こうした江戸東京の歴史や文化を世界の人々と「感動を分かち合う」為にも、その遺産について人類共有の歴史文化遺産としての本質的な価値を明らかにし、私達の使命は、次世代に継承し、近未来の世界遺産を目指していく。

4. 一方、高度経済成長期を境に、首都東京の空高く、摩天楼は今に続く。都市開発の一方で、東京の歴史性が薄れてきたことは否めない。現代都市文化と歴史性、文化的景観及び環境を尊重する都市の有り方や開発に向けて、私達も自らに問いつつ、共に学び、そして、声を上げていこう。

5. 東京の各地域では、産学官民大小のコミュニティや団体による江戸東京の多彩な文化や歴史を活かした活動や“まちづくり”が、展開され、市民の誇り(シビックプライド)となっている。多様な主体とゆるやかな交流により、江戸東京の歴史文化資源を活かした観光まちづくりに貢献していく。

2020年7月

一般財団法人 江戸東京歴史文化ルネッサンス

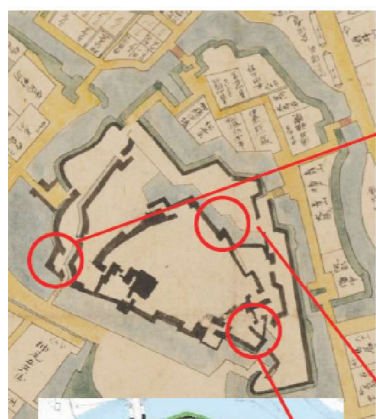
江戸東京の特性と江戸城の価値

現在の東京には江戸城の天守や政庁のシンボルであった本丸御殿は焼失したものの、家康・家光時代の城門、石垣も良好に残っています。江戸から東京に名を替えて都心にはその移り変わりを示す遺産が多く分布しています。

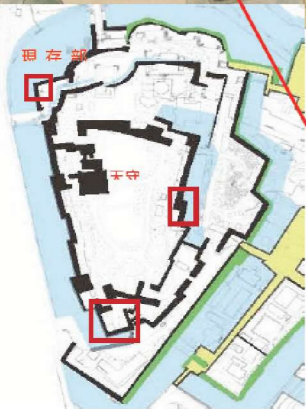
家康の時代

慶長13年頃の江戸城本丸を示した「江戸始図」(松江市所蔵)と復元図

慶長11年(1606)築造の江戸城本丸の現存石



白鳥源と富士見櫓台、北結橋門跡



(1)江戸城は徳川将軍家三代の約半世紀をかけて天下普請(御手伝普請)として築城した我が国最大級の城郭である。その痕跡は都心のなかで良好に残り、江戸城外堀跡はその規模を伝えている。特に江戸城の中心部である本丸周辺は、幕末の度重なる火災によって天守・御殿建築は焼失しているもの、城門や櫓、番所などの建築物が保存・復元され、堀や石垣など縄張りを示す曲輪が良好に残っている。また、近世社会の確立と動向に対応して城郭整備が行われ、その痕跡を実物資料として知ることができる。

(2)江戸城下町は、江戸城外郭(外堀)内を中心に武家地、町人地、寺社地が置かれ、家康入国直後には江戸城城門を起点とする江戸五口が配置され、日本橋を起点とする五街道と城下町が整備された。江戸の城下町は、開幕後の約一世紀には人口約百万人を抱える大都市となり、その範囲は、江戸城外郭を超えて拡大し、概ね東京市旧15区となった。また開発や災害、社会の矛盾を示す痕跡も多くある。

(3)明治維新以後、江戸は東京と名を替え、江戸城は皇居(皇城)となり、文明開化期、明治中期の市区改正計画、震災後の帝都復興計画、戦後の復興などを経験し、都心にはこうした経緯を示す近代化遺産が分布し、江戸期から昭和期にかけての文化財等のあり方は各地域の特性を示している。

家光の時代

赤:慶長11年、青:慶長19年、緑:元和6年、茶色:寛永12年、茶色:明暦3-万治元年。(1606-1658年)



「口永元年 美濃屋庄次郎築之」



上から金沢藩前田家による天守台、黒田家による中之門石垣(右の刻印は中之門石垣に刻まれた元禄地震後に鳥取藩池田家が改修したことを示す)最下段は中之門石垣石とそこに刻まれた「進上」(献上石)。この時の石垣改修は、伊豆石ではなく西日本の花崗岩が各大名により切り出された。

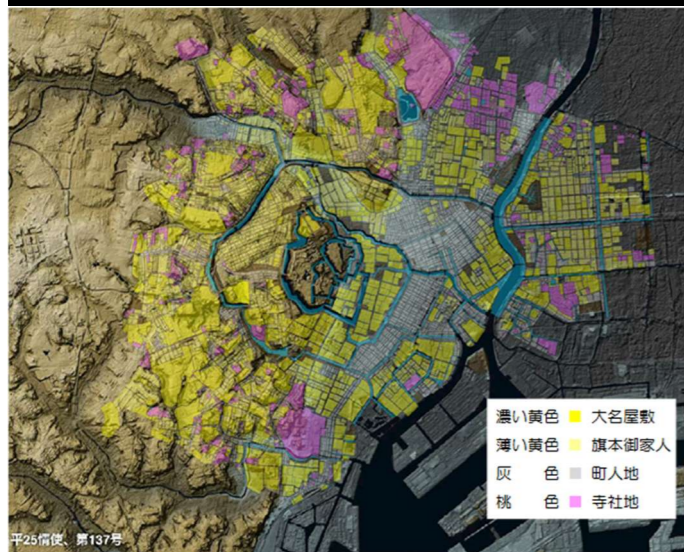
明暦大火(1657年)後に改修された江戸城本丸の石垣の遺構



天守台と中之門の石垣



江戸の地形と町割



寛永年間(家光)の江戸城本丸



今回調査した歴史文化遺産の600事例

